

1年『オツベルと象』

——「言葉の用い方」という視点で登場人物と自分とを比較して読む——

○単元・教材の目標とポイント

【単元・教材の目標】

- ・物語に使われている言葉には複数の意味があることを理解し、語彙を豊かにしている。

〔知識及び技能〕(1)ウ

- ・言葉のもつ多義性に着目し、登場人物の人物像やできごとの因果関係について想像を広げ、物語の内容を解釈している。

〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(1)ウ

【単元・教材のポイント】

本単元は、物語に登場する人物の人物像を、「登場人物の言葉の用い方」という視点で捉え、その「言葉の用い方」ゆえに起こるできごととの因果関係を読み取りながら、登場人物と自分との共通点や相違点に着目して物語の感想をまとめる学習である。

本単元では物語を読むための基礎的スキルとして、登場人物の人物像を的確に読み取ることが重視されている。登場人物の人物像は、登場人物の行動や心情などを具体的に描いた描写から読み取ることができるが、本単元では、特に「言葉の用い方」を切り口に人物像を捉えるため、「会話文」に着目する。ただし、それ以外の情報に関与しないということではなく、むしろ「会話文」に表れない登場人物の思惑を理解するためには、「会話文」以外の情報を併せて読まなくてはならない。また、人物像を規定する情報は物語のいたるところに散りばめられており、複数の叙述を関連づけて読み取ることが求められる。

『オツベルと象』では、オツベルと白象の関わりが中心に描かれる。用いる言葉の裏に真意を隠しながら言葉を巧みに操るオツベルに対し、言葉を額面どおりに受け取る白象。両者の違いは、次第に白象を苦境へと追い詰め、さらにはオツベル自身を死に追いやることになる。物語の登場人物の言葉の用い方が、この物語の展開に大きく関わっているのである。最後、助かったはずの白象が、喜びながらではなく、「寂しく笑って」お礼を言ったことに疑問を抱く生徒も多いと考えるが、その問いを解決するためにも、「登場人物の言葉の用い方」という視点は重要である。

生徒たちがその視点を用いて単元の学習を継続していくためには、その視点を用いるの必要性を感じなくてはならない。そこで、登場人物と自分との共通点や相違点に着目して物語の感想をまとめる活動をゴールに設定した。登場人物と自分との共通点や相違点を捉えるためには、登場人物と自分とを比較する基準となる視点が必要である。また、物語の感想をまとめるためには、物語を深く読む必要があり、その鍵となる視点が必要である。「登場人物の言葉の用い方」という視点は、その両者を兼ね備えたものであり、用いるの必要性を感じられるものであると考える。

登場人物と自分との共通点や相違点に着目して物語の感想をまとめる活動に取り組む際、生徒たちは「自分に似ているのは誰なのだろう」という問いを抱く。その問いを、単元を通して追究していけるよう、単位時間ごとに登場人物と自分との共通点や相違点について考えたことを振り返る活動を設定する。学習と振り返りのくり返しの中で、言葉の用い方が自分と似ている登場人物を探し、その言葉の用い方と物語の中で起こるできごととの因果関係を読み取ることで、自分と物語とを関わらせ、物語に対する解釈を深めていけると考えた。

なお、本単元で身につけた「読み方」は、別の物語と対峙した際にも生かされることが望ましい。そのためには、各自の学びがメタ的に自覚される必要がある。学習の振り返りによって自らの学びの成果を実感することは、次の学びへと向かう力を生み出すことにもつながる。

〈学び方のポイント〉

本単元で人物像を読み解く際に用いる視点は、「登場人物の言葉の用い方」である。生徒たちは、人物像を規定する言葉は「どの」言葉か、そして「どのように」用いられているかを読み取りながら、物語の解釈を進めていくことになる。なお、前者を読み取る力は〔知識及び技能〕に関わり、後者を読み取る力は〔思考力、判断力、表現力等〕に関わるものとする。

そもそも生徒たちは物語を読む際に、「言葉の用い方」に気をつけて登場人物の人物像を捉えようという視点をもたない。よって、その視点はこちらから与える必要がある。生徒たちは、これまでの経験から、用いられる言葉には裏の意味が隠されていることを知っている。そして、実際に裏の意味を含む言葉を用いたり、用いられたりする経験をもつ生徒たちも少なくない。そこでまず、複数の意図が読み取れる会話文を含む自作の文章を資料として提示し、言葉には表の意味と裏の意味があることの共通理解を図る。そして、自分の言葉の用い方はどちらに近いかを振り返るよう促すことで、生徒たちが言葉の多義性を利用したり、影響を受けたりしながら言語を用いてきたことに気づくようにする。さらに、その視点をを用いて物語を読む必要性を感じられるよう、『オツベルと象』に出てくる人物の中で、自分に似ている人物を探すという課題を設定することで、自分と物語とを関わらせやすくする。

自分と物語とを関わらせることで、それぞれの捉える人物像に差が出てくることが予想される。そのズレを明らかにすることにより、言葉のもつ意味の広がりや深まりが期待できる。また、そのズレこそが言葉のもつ多義性に気づくきっかけにもなる。よって、学習の際は、自分に似ていると考える登場人物が異なる生徒どうしでグループを編成し、課題に取り組ませたいと考えた。

視点を知り、視点をを用いる必要性を得た生徒たちが、その視点をを用いて文章を読むためには、「視点の用い方」を理解しなくてはならない。本単元で用いる視点は「登場人物の言葉の用い方」であり、その視点で人物像を捉えやすくするため、登場人物ごとに色を変えて会話文を着色した本文シートを用い、会話文に焦点化した学習を行う。会話文に焦点化することで、オツベルの言葉の用い方と白象の言葉の用い方の違いや、白象と象の仲間たちの言葉の用い方の違いが浮き彫りになり、その違いが物語に与える影響を読み取りやすくなると考える。なお、その際に「登場人物の言葉の用い方」を判断する基準として、横軸を「話し手として本心を語っているか」、縦軸を「聞き手として素直に受け取っているか」としたマトリックスを用意し、登場人物を配置することで、人物像に対する考えを視覚化できるようにする。（P.5「参考」を参照）

○評価規準

知識・技能	思考力、判断力、表現力等	主体的に学習に取り組む態度
・言葉を発した側と受け取った側では意味が異なる場合があることを理解し、その意味の違いから登場人物の人物像を読み取っている。	・言葉を発した側と受け取った側に生じる理解の違いを根拠にできごとの因果関係を読み取り、自分の考えを説明している。 C読むこと	・一つの言葉から複数の意味が読み取れることや、その結果起こることに興味をもち、物語を自らのこれまでの生活や今後の生活と結びつけて感想をまとめようとしている。

○学習指導計画（全8時）

時数	学習活動	評価規準
1	○『オツベルと象』を読んで時間的な設定を把握し、学習課題をつかむ。	◇物語の中で起きるできごとをカレンダーの正しい日に配置している。
2	○学習課題をつかむ。	◇「言葉の使い方」という視点で、自分に似ている登場人物について記述している。
3	○登場人物の人物像を把握する。	◇「言葉の使い方」を基準に、それぞれの登場人物の人物像を説明している。
4	○登場人物の「言葉の使い方」が原因で起きたと考えられるできごとを捉える。	◇前時までに捉えた登場人物の「言葉の使い方」と物語中のできごととの因果関係を、具体的な叙述を根拠に記述している。
5	○登場人物の「言葉の使い方」が原因で起きたと考えられるできごとについて他者と交流する。	◇登場人物の「言葉の使い方」と物語中のできごととの因果関係を、具体的な叙述を根拠に説明している。
6	○登場人物の「言葉の使い方」が原因で起きたと考えられるできごとについて考えをまとめる。	◇登場人物の「言葉の使い方」と物語中のできごととの因果関係を、叙述を根拠に記述している。
7	○物語の主題について話し合う。	◇登場人物の「言葉の使い方」と物語中のできごととの因果関係を根拠に、「言葉の使い方」に関わらせて主題をまとめている。
8	○本単元の学習を振り返り、感想を書く。	◇「言葉の使い方」を軸にした物語の読み方によってできたことやわかったことについて、感想を記述している。

○本時の展開（3／8時）

【ねらい】

- ・会話文を中心に登場人物の人物像を話し合うことをとおして、言葉の使い方に裏表があるオツベルと、言葉の使い方に裏表がない白象との違いを捉えている。

【本時の展開例】

学習活動（・は生徒の反応例）	指導の留意点	◇評価規準
1 本時のねらいをつかむ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「会話文」に注目して、登場人物の人物像を説明できるようになろう。 </div> 2 登場人物の人物像について話し合う。 (1) グループで意見を交流する。 ・オツベルは、話し手としては本心を語らないし、聞き手と	○登場人物の人物像に課題意識がもてるよう、前時の学習で振り返った自分の言葉の使い方に近い登場人物を問いかける。 ○登場人物の会話文に焦点化できるよう、登場人物ごとに色を変えて会話文を着色した本文シートを提示する。 ○テーマに沿った話し合いが行われるよう、「言葉の用い	◇自分の言葉の使い方と近い登場人物を探そうとしている。

<p>しては素直に受け取っていないね。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白象が「息で、石も投げ飛ばせるよ。」と言ったときに、オツベルはどきっとしているから、「もしかして石を投げ飛ばされるのか。」と心配になったのではないかな。 ・でも、白象にはそんなつもりはなさそうだね。 ・白象は、話し手としては本心を語っていて、聞き手としても素直に受け取っているね。 <p>(2) 全体で考えを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕たちは、オツベルは聞き手として素直に受け取っていないと考えたけれど、素直に受け取っていると考えた人たちもいるんだね。確かに、素直だからこそどきっとしたとも考えられるね。 <p>3 本時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「会話文」に着目したら、登場人物の人物像が明らかになったな。 	<p>方」という視点を提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○登場人物の人物像に対する考えを明確にもてるよう、横軸を「話し手として本心を語っているか」縦軸を「聞き手として素直に受け取っているか」というマトリックスを用意し、登場人物ごとに示しながら話し合うよう促す。 ○叙述を根拠に人物像について話し合うことができるよう、本文シートを用いて話し合っているグループを賞賛する。 ○各グループの考えが一覧できるように、黒板に拡大したマトリックスを用意する。 ○多様な考えにふれられるよう、異なる意見が出された場合には理由を話すよう促す。 ○本時の学習の成果を振り返ることができるよう、「会話文」を中心に考えたことを振り返るよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇マトリックスの中に、登場人物の名前を記述している。 ◇マトリックスのその場所に名前を配置した理由を、本文シートに線を引いたり指さしたりしながら伝えている。 ◇他のグループの考えを聞き、自分たちのグループの考えを問い直している。 ◇「会話文」に着目したこと、よかったことやできたこと、よかったことなどについて記述している。
--	--	--

○授業の成果と課題

【「言葉の使い方」という視点で人物像を捉えたことについて】

登場人物の人物像を捉えるための観点はいくつもあるが、その中で「言葉の使い方」に限定したことで、学習の道筋が明確になった。特に、オツベルと白象という二人の登場人物を比較する際には、共通する視点のおかげで人物像について議論しやすく、両者の違いについても明確に捉えやすかったと考えられる。

【「登場人物と自分とを比較して読む」という課題の設定】

単元を通して「登場人物と自分とを比較して読む」という課題を設定したことで、生徒は登場人物の向こう側に、自分自身の言葉の使い方を振り返っていた。このことは、生徒の学習意欲を高める効果があったとともに、物語と自分とを関わらせながら読む態度の育成にもつながった。

また、本単元で身につけた読み方が別の作品と出会ったときに生かされることをねらい、単元を通して学習の成果の振り返りを行ってきた。今後、他の賢治作品や他の文学的文章においても「言葉の使い方」に着目した読みが行われるかどうか、実践を重ねて検証していきたい。

○参考

【参考文献】

- ・中野登志美(2012)「宮沢賢治「オツベルと象の教材性の検討—言葉の二重性という観点から—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第61号, pp.153-161」

【マトリックス】

